

アメリカ・パームスプリングスの棉花畑、広さにびっくり

県青年リーダー養成 海外研修記

本市から遠藤茂さんが参加しましたので、研修レポートをお願いしました。

第二十回県青年リーダー養成海外研修(参加者三十四人)に参加し、十月十四日から二十五日まで十二日間、カナダ、アメリカを訪問しました。海外は初めての訪問で、不安と期待でいっぱいでした。十四日にカナダ有数の大都市で、西の玄関口と呼ばれるバンクーバーに到着。北緯五十度ほどに位置し、日本より冬の訪れが早く、朝夕はかなり冷え込みました。雨の多い所なので、カナダの人たちは小雨くらいなら、傘をささずに過ごす人が多いらしい。街は樹木が多く、どこを歩いても美しく、空き缶やタバコの吸殻の目立つ日本とは、比べものにならないくらいです。

市内の社会福祉施設「キンズマン・リハビリテーション・センター」を訪れ、市民の福祉に対する考え方を学ぶことができました。ここは、身体の不自由な人にリハ

遠藤茂さんのプロフィール

昭和39年11月7日生まれ、24歳。中大郷。家族は両親、弟の4人。新潟江南高校卒業後すぐ家業の農業に就く。性格は「一見っかるところが多い」とは本人の弁。

ビリの器具や場所、情報などを提供する所で、行政からの補助はほとんどなく、約三万人のボランティアの人たちが、市民の寄付を募り運営しているのだそうです。協力してくれる家も年々増え、障害者に対する差別も少なくなり「どんな子でもみんないっしょの学校へ通わなければならない」という決まりもあるそうです。

その後、バンクーバー市長を表敬訪問。市の助役ジョン・ベーカー氏は、デイスカッションで、カナダの青年に対し「個人主義を控え、もっともつと市に貢献してほしい」と訴えていました。

なんだかカナダの若者は、社会に背を向けているのかと思つてしまいましたが、とんでもない。カナダ赤十字本部でのボランティアは、二十代の若者が中心となつて行われているし、YMCAでは、青年たちがプールやトレーニングジムで、後継者の指導に熱心に取り組んでいるのです。助役が言われたのは、それだけ青少年に対し、今以上に大きな期

日本の経済力の大きさと世界の広さを実感しました



待を持っているのだ——と理解できるのです。

四日間のバンクーバー滞在後、カルガリー経由でカナディアンロッキーの観光の中心地バンフへ。二日間たっぷり、雄大で美しい自然に触れてきました。

研修の七日目に、いよいよアメリカはロサンゼルスに到着しました。高層ビルが立ち並びフリーウェイが縦横に走り、車がひしめき合つてまさに大都市を感じさせます。まず驚くことは、車の数の多いこと。そして三台に一台が日本車です。オレンジコーストの大学

へ行った際、若者の車はほとんど日本車でした。ロスでは新しい大きなビルは日本の会社のもので見て間違いないと言われ、日本の経済力の大きさを改めて感じることも、米国の反日感がわかるような気がしました。

ここでの研修はホームステイで、日系二世の農家にお世話になりました。内陸部のパームスプリングスという農業地帯へ案内され、広大な土地にびっくり。耕地面積の単位が一けたも二けたも違つていいます。砂漠地帯であったのを、塩抜きし、百歩離れたコロラド川から用水を引き、りっぱな野菜や果実を栽培しているのです。農業に対する姿勢や意欲に、今までの工業的な農業というイメージが、変わつてきたような気がしました。

今回の研修で、貴重な体験をさせてもらいました。世界の広さ、そこに住む人々のさまざまな生き方に触れて、一つの物事に対し、いろいろな角度から見られる目を持つたのではないかと思っています。そして、今後の大きな自信になったことも確かです。

※YMCA：キリスト教青年会、社会奉仕活動を行う団体

アメリカ南部 アトランタでのひととき

語る人

渡辺 元さん

(五六の町六・六十一歳)

県内外の出張歴も長く広範であるが、欧米には三回、研究、視察などの機会があった。いずれも思い深いものがあるが、とりわけアトランタでM氏の家庭に招かれ、一夜の歓待を受け、フェイス・トゥ・フェイスの触れ合いを得たことは忘れがたい。五十四年九月四日のことである。

「ハッピーはハッピーだ」と言っ

私の思い出

あの時この場所

アメリカ・アトランタ (ジョージア州)



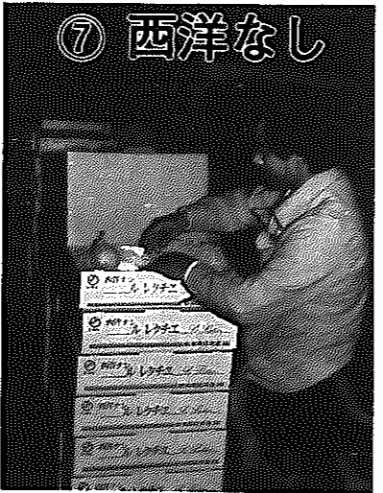
贈ると無邪気に大喜び。地図で新潟の位置を示すと「ソ連に近くて危険だ」。原爆保有の中国と日本の接近に対していろいろと鋭い質問を受けて、一気にアルコールも回つてシドロモドロ。ポケット辞書をめくつて「これはおもしろい」と取り上げて、返してもらうのに一苦労。話の間に大きなステーキも食べなければならぬ。かみ切るのも大変で、ついには飲み込む始末。

塀のない広い敷地、屋内は冷暖房完備でスイートルームもつぽ。バカンスにはニコノス(水中カメラ)を携えてカリブ海のアクアラングを楽しむという。海底から採取した貝を幾つかいただいた。

M氏はシボレーで通う勤務医で、自分も中流だと言った。ドイツ系のため、民族的差別もあると言った。YES、NOが明瞭で陽気な中にも憂うつをかいま見たものである。

その後、円高ドル安で債権国、債務国の所を変えた。牛肉、オレジンジに続き、米輸出にも熱心なアメリカ。今、アメリカの庶民の考え方や対日感情はどんなものであろうか。

しるねの農産物



西洋なしは、果物の高級化志向に乗って、近年需要が急激に増加して来ています。独特な形で、口に入れるととても甘く、とろけるような柔らかさ。しかも冬に食べるという事で、年末年始の贈答用として人気が出たようです。

本市の西洋なしは「ルレクチエ」という品種が主で、「ろくち」なども呼ばれています。明治の後半にフランスから三十種類の苗を取り寄せ、東萱場で

試作されたのが始まり。しかし、栽培が難しく、なかなか普及しませんでした。研究が進み、普及され出したのは十年ほど前からで、近年、県から栽培指針も発表されました。

三年前から発足した「西洋なし研究会」は、栽培技術の研究だけでなく、ワインの試作にも取り組んでいます。これが成功すれば、生食で売れないものも商品化が可能とあつて、会員から熱い期待が寄せられています。

生産者の声



小池美与志さん (東萱場・59歳)

西洋なしの栽培は、息子で四世代にわたります。栽培が難しいからよけい挑戦する楽しみがあるのではないのでしょうか。植えた木を切らないように。見込みをつけたら、捨てないでがんばることがたいせつです。



冷暖房完備の屋内、M氏は中流というが……